

巻頭言

教育研究紀要委員会編集委員

スポーツ健康科学部教授

矢田貞行

今年度は、新型コロナウイルスという我々がこれまで経験したことの無い未曾有の疫病が蔓延し、第二波、第三波が次々と襲ってくる中、小・中・高は言うまでもなく大学においても、学びの営みを止めることなく、オンライン授業という新たな教育手法を駆使して、我々教員は悪戦苦闘しつつ、日々の学生の教育に取り組んできた。

昨年(令和2年)は卒業式も入学式も実施されず、しかも2か月にわたる休校措置を経て、6月から本学でもようやくオンライン授業が始まった。これまでチョークと黒板だけで旧態同然の授業を行ってきた我々年輩者にとって、Teams を用いた学生への授業の開始は、まさしく青天の霹靂であった。機械馴れしない不得手なパワーポイントによるパソコン操作、大多数の学生の姿が見えず、本当に自分の声や言いたいことが伝わっているのかどうかさえ明確に確認できない不透明な授業展開の中で、何度も疑心暗鬼に陥ることさえ度々あった。途中、映像が見えない、声が聞こえないといった、引切り無しに来る学生たちの苦情のメールの数を前にしてパニック状態になったことさえあった。

6月下旬からはコロナ状況の緩和に伴い、学生の半数が対面、半数がオンラインという分散授業形態への変更により、オンライン授業でうまく対応できなかった箇所の復習による補填に必死に取り組んだ。しかし、それも束の間、再度オンライン授業の復活、それに基づく試験の実施といった慣れない下での授業評価の実施等を経て、半ば混乱の中で春学期は終わった。

秋学期も当初から対面とオンライン授業の併用で始まり、途中コロナの感染者数の減少も見られたものの、振り返ると結局オンラインの比率が増すといった繰り返りで、秋学期も終わりを迎えた。そして、令和3年度もこのような状態の反復が予想される中、引き続きコロナ禍の下での授業形態を維持しなければならない状況にある。

今回本研究紀要第6号においても、こうしたコロナ禍における取り組みを扱った授業報告が数編掲載されている。一読すると、そこではこれまで我々が経験したことの無いこのような禍に対して、知恵を絞りアイデアを出して困難を克服して学生の学びを絶やすことなく、知の探求、教育の継続を願って日々取り組む教員間の努力の成果が随所に滲み出ている。また、そこには新しい教育の探究、学びの模索がなされており、大学における新たな教育の展開を窺い知ることができる。

人間は困難に直面する時、様々な思いを巡らし、知恵を出して新たなものを創り出す無限の可能性を秘めている。コロナ禍に立ち向かう中で、我々は良き知恵、アイデアを

共有し、大学教員皆がノウハウを享受して、学生1人ひとりに寄り添う新たな大学教育の創生につながる取り組みを育んできている。本研究紀要に載せられた授業の成果を通して、新しい大学教育の営みが実を結び、今後一層展開していくことを強く期待する次第である。